２０１６年２月１５日
公益財団法人イオン環境財団

生物多様性の保全と持続可能な利用に関し顕著な功績のある個人を顕彰する国際賞

「The MIDORI Prize for Biodiversity 2016」公募開始

公益財団法人イオン環境財団（理事長 岡田卓也 イオン株式会社名誉会長相談役、以下、当財団）は、本年２月１５日（月）より「The MIDORI Prize for Biodiversity 2016（第４回生物多様性みどり賞）」の公募を開始します。

本賞は、受賞者の生物多様性に関する積極的な活動を紹介することで優れた業績を称えると同時に支援し、生物多様性についての関心を高めることを目的としています。

昨今、地球資源への負荷は増大し続け、生態系の破壊や分断化、生物多様性の減少が引き起こされる中、これらの恵みを共有し、様々な生命が共生する美しい地球の将来を次の世代に引き継ぐための取り組みが求められています。

国連が定めた「国際生物多様性年」の２０１０年に、生物多様性条約第１０回締約国会議（ＣＯＰ１０）が名古屋において開催されました。本賞は同年に設立２０周年を迎えた当財団がこれに賛同し創設、生物多様性条約事務局と共催で実施しています。以来、国内賞「生物多様性 日本アワード」と交互に、隔年で開催しています。

これまでにアジア、北中南米等の世界１０カ国の方々が受賞され、顕彰を契機に世界各地で環境保全活動の連携が広がっています。

当財団との連携については、２０１０年度受賞者のエミル・サリム氏（インドネシア）からの提案により、「インドネシア ジャカルタ植樹」が３年間実施されました。

また、２０１２年度にボ・クイ氏（ベトナム）が受賞したのをきっかけに、２０１３年からベトナム国家大学ハノイ校が「アジア学生交流環境フォーラム（ＡＳＥＰ）」（※１）に参加し、さらに「ベトナム ハノイ植樹」開催へとつながりました。

設立２５年を迎えた当財団は、今後もさまざまな環境保全活動に取り組み、生物多様性の保全と持続可能な利用の促進に貢献してまいります。

（※１）「アジア学生交流環境フォーラム（ＡＳＥＰ）」：グローバルな視野で活動する環境分野の人材育成を目的とし２０１２年に開始。アジア各国の大学生が集まり、各国の自然環境や歴史・文化、価値観の違いを学びながら生物多様性について意見交換し合います。

「The MIDORI Prize for Biodiversity 2016
（第４回 生物多様性みどり賞）」公募について

主　　催：公益財団法人イオン環境財団
共　　催：生物多様性条約事務局（※２）
後　　援：環境省
公募期間：２０１６年２月１５日（月）～６月３０日（木）
要　　件：候補者には、下記のうちひとつ以上の要件が求められます。
・生物多様性に関する多大な貢献が認められる顕著な業績がある
・生物多様性に関連する活動に発展的影響を与える可能性がある
・世界の生物多様性に関する様々な活動に影響を与える取り組みをしている
顕彰内容：３名に授与、受賞者には木製楯、記念品、副賞（１０万ＵＳドル）を贈呈
授 賞 式：２０１６年１２月、生物多様性条約第１３回締約国会議（COP13）開催に合わせ、メキシコ カンクンで授賞式を実施する予定です。また、同月に東京で開催される受賞者フォーラムにおいて受賞者の記念講演を行います。

審査委員会：（敬称略、2016年2月15日時点）

審査委員長　岡田 卓也（公益財団法人イオン環境財団 理事長）
審 査 委 員　ブラウリオ・フェレイラ・デ・ソウザ・ジアス（共催者代表、生物多様性条約 事務局長）
（アルファベット順）　マリアナ・ベヨット（国連開発計画生物多様性資金イニシアティヴ・ナショナル・コーディネーター）
崔 在天（チェ ジェチョン）（韓国生態院 創設院長、梨花女子大学エコサイエンス特別教授）
岩槻 邦男（東京大学 名誉教授）
黒田 大三郎（公益財団法人地球環境戦略研究機関 シニアフェロー）
あん・まくどなるど（上智大学大学院 地球環境学研究科 教授）
高野 孝子（早稲田大学 留学センター 教授）
涌井 史郎（東京都市大学 環境情報学部 教授 国連生物多様性10年日本委員会 委員長代理）

応募方法：ウェブサイトにて候補者の推薦を受け付けます。「生物多様性オンラインマガジン The MIDORI Press」（http://www.midoripress-aeon.net/）をご参照ください。

（※２）生物多様性条約：生物多様性の保全・構成要素の持続可能な利用・遺伝資源の利用から生ずる利益の公正な配分を目的とした国際条約です。気候変動からの脅威を含む、生物多様性・生態系を脅かす全ての危機への対応に取り組んでいます。

以上

ご参考　**歴代受賞者　一覧**

■The MIDORI Prize for Biodiversity 2010（第１回 生物多様性みどり賞）受賞者



◇ジャン・ルミール　（カナダ）
生物学者　探検家　映画製作者
ルミール氏（1962 年生まれ）は、生物学者でもあり映画製作者でもあるというユニークな経歴を活かして、環境問題の意識啓発に大きく寄与し、とりわけ生物多様性や気候変動問題に関連した活動に積極的に取り組んでいる。



◇グレッチェン・Ｃ・デイリー　（米国）
スタンフォード大学　教授
スタンフォード大学生物科学学部にて学際的な研究を行っているデイリー博士（1964 年生まれ）は、これまで社会・経済活動によって破壊されてきた環境に対して、経済的な価値を見いだし、生態系サービスという概念からその保全に貢献してきた。



◇エミル・サリム　（インドネシア）
インドネシア大統領諮問会議　議長　元インドネシア人口・環境大臣
サリム博士（1930 年生まれ）は、インドネシア国内の環境政策形成や実施、さらには生物多様性に関する NGO の創設などに取り組んできただけでなく、環境保全と経済の両立に関する数々の国際会議で先導的な役割を果たしてきた。当財団が 2011 年から実施した「インドネシア ジャカルタ植樹」は、同氏の提案をきっかけにスタートした。

■2010 年 国際生物多様性年特別賞 受賞者



◇アンゲラ・メルケル　（ドイツ）
ドイツ連邦国首相
メルケル首相（1954 年生まれ）は、2005 年ドイツ連邦首相に就任以来、元連邦環境・自然保護・原子力安全大臣としての経験などをいかし、気候変動や生物多様性といった地球規模の環境問題に関し、強いリーダーシップを発揮してきた。

■The MIDORI Prize for Biodiversity 2012（第２回 生物多様性みどり賞）　受賞者



◇フアン・カルロス・カスティーリャ　（チリ）
チリ カトリカ大学生態学部　教授
南米における海洋生態学のパイオニア。生物多様性の保全と持続可能な利用を促す国の政策に関わり、政府と沿岸・漁業コミュニティの連携による小規模海洋保護区の共同管理が、コミュニティの持続的な発展、グリーンエコノミーの形成に貢献可能であることを示した。



◇ロドリゴ・ガメス=ロボ　（コスタリカ）
コスタリカ生物多様性研究所（インビオ）代表
メガダイバーシティの国 コスタリカにおいてインビオを設立、主導。インベントリー作成、環境教育、生物資源調査、政策・法規制、土地利用管理・技術支援、能力開発、エコツーリズム等、様々な活動分野で生物多様性の保全と持続可能な利用の成功例を世界に示した。



◇ボ・クイ（ベトナム）
ベトナム国家大学ハノイ校自然資源管理・環境研究センター名誉総長
ベトナム戦争で疲弊した国土を再び緑化するため、住民主体の環境活動を推進し、国家環境戦略に大きく寄与したことから「ベトナム環境保護の父」と呼ばれている。環境保全・修復の模範を示し、人為的に破壊された自然の再生が可能であるという美しい希望を与えた。同氏の受賞をきっかけに、2013 年からベトナム国家大学ハノイ校が「アジア学生交流環境フォーラム（ASEP）」に参加し、さらに当財団が2014 年から実施している「ベトナム ハノイ植樹」へとつながった。

■The MIDORI Prize for Biodiversity 2014（第３回 生物多様性みどり賞） 受賞者



◇カマル・バワ　（インド）
アショーカ生態学環境研究トラスト（ATREE、インド）代表
マサチューセッツ大学 ボストン校 特別教授
熱帯林の研究において、森林の再生に関する新しい手法の考案や森林崩壊が生物多様性の枯渇を招くことを示すなど大きな成果を得たほか、非木材の林産物採取に関する持続可能性や、農業ランドスケープにおける生物多様性の主流化など、保全生物学分野の研究で重要な成果を導き出した。また、アショーカ生態学環境研究トラストを設立。その運営にリーダーシップを発揮し、生物多様性の研究、教育、実践を総合的に推進している。



◇アルフレッド・オテング＝イエボア　（ガーナ）
ガーナ生物多様性委員会 議長
アフリカを代表する生物多様性の指導者。生物多様性条約科学技術助言補助機関会合（SBSTTA）議長など国際機関の要職を歴任、グローバルな見地から生物多様性に関する国際交渉等をリードし、世界的な影響を与えてきた。特に、科学と政策の対話の重要性を提唱し、生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム（IPBES）の設立、運営に大きく貢献してきた。



◇ビビアナ・ヴィラ　（アルゼンチン）
ビクーニャ／ラクダと環境 学際研究プロジェクト（VICAM）代表
アルゼンチン学術研究会議（CONICET） 主席研究員
アンデス地方の野生動物ビクーニャについて、地域の先住民の伝統的な知識と生態学、動物行動学、動物の福祉等、現代の科学を融合させて保全対策の実践を主導した。また、経済的価値が高いビクーニャの体毛の持続可能な利用を通じた地域コミュニティの支援や環境教育の実施も統合的に推進し、野生生物の保全と地域コミュニティの安定的発展の両立を実現し、地域に根差しながらも世界的に注目すべきプロジェクトの牽引役として大きく貢献した。